

### 体育の授業実践から学んだこと

佐々木雅巳先生による5年生の授業「動きを高め、ゴールをめざせ！～サッカーを基にした簡易化されたゲーム～」は、子どもたちが積極的にからだを動かそうとする姿が見られる実践であった。大学で中等教科専門科目のサッカーの授業を担当する者として、さまざまなことを学ばせていただいた。以下では、それを2点に絞ってご紹介したい。

1点目は、子どもたちがからだを動かすための土台となるボール操作などの基本練習を丁寧に行うことの大切さである。とりわけ、「連続動きカード」の活用により、子どもたち自身が意識するポイントを明確にされている点は、大変参考になった。4年生までの積み重ねがあるとはいえ、短期間のうちに多くの子どもたちがボールの蹴り方や止め方などを身につけていることに驚かされた。この基本練習がその後の発展的な学習の下支えとなっていることは間違いないだろう。

2点目は、サッカーの技術のなかでも、あえて「ドリブル」を重点的に取り上げることの意義についてである。結論から申し上げれば、「ドリブル」を取り上げたことが、子どもたちの「動きを高め」という主題への接近に、大きな意味を持ったのではないかと思う。

サッカーは、たとえば野球のように、プレイヤー一人ひとりに「打順」という個人の出番を保証する種目ではない。大人の試合90分間のうち、一人のプレイヤーがボールに触る時間は平均で数分間といわれる。得意な人がより多くボールに触るとするならば、得意でない人はほとんどボールに触ることができないということになる。雅巳先生の「ドリブル」を取り上げた授業は、サッカーが得意ではない子を意識しつつ、「ボールに触りたい」という子どもたちの欲求に応えようとしている点に大きな意義があると思う。

しかしながら、「ボールに触りたい」という欲求をすべての子どもたちがからだです直に表現できるかとなると疑問が残る。5年生ともなれば、「ボールに触るのはいいけど、その後で失敗したらどうしよう」とか「相手がボールを奪いに来たらどうしよう」などの不安が先にきて、積極的にボールに向かえない子もいると思われるからだ。そこで雅巳先生が取り組まれたのが、意図的に“ダンゴ状態”をつくり出すことであった。

一般的に、小学校低学年や初心者のサッカーにおいては、「ボールに触りたい」という欲求をもったプレイヤーがボールに群がり、ボールを中心とした“ダンゴ”のような状態が形成されるといわれる。この“ダンゴ状態”は、現代サッカーにおいては非効率的な状態といえるが、一方では、子どもたちにぜひとも経験させたい状態でもある。どういうことか。“ダンゴ状態”のなかで、あるプレイヤーが「あれ？これじゃあうまくボールが運べないぞ」と気づき、その“ダンゴ”から抜け出そうと、前後そして左右へと移動を開始するプレイヤーが出てくることで、サッカーのゲームそのものが発達していくと考えられているからである。

しかし、先にも述べた通り、子どもたちは「ボールに触りたい」という欲求を抑えようとする面があるのではないか。そうだとすると、“ダンゴ状態”を経験できずに、「あれ？」という気づきを実感することなく、ボールから離れてプレイする子どもが出てくるかもしれない。雅巳先生の授業実践、具体的には、「相手に取られないドリブル」を意識したタスクゲームや「サイドマン」を置いた確かめのゲームでは、こうした子どもたちの現状を踏まえて、あえて“ダンゴ状態”を経験させるために行われたものと理解することができる。

この「ドリブル」の経験は、子どもたちの積極的な動きを生み出すだけでなく、仲間とかかわる場面もつくり出していた。ゲーム後におけるお互いの動き方についてのアドバイスのみならず、ゲーム中においても言語を使わないコミュニケーションが多く見られるようになったように思う。このような成果は、雅巳先生ご自身のスポーツ経験や授業中の適切な声掛けなどによるものであることは疑いのないことであろう。しかしその背景には、「ドリブル」に着目して動きを高めようとするねらいがあったことも確認しておく必要があるだろう。

テレビで観るサッカーのダイジェスト映像は、その多くがシュート（ゴール）シーンであり、鮮やかにパスをつないでゴールに迫るシーンである。高度に組織化された現代サッカーはドリブラーの生きる道を狭めている。しかし、そうだからといって、子どもたちの「ボールに触りたい」という欲求を抑えたままにしてはいけないということを雅巳先生の授業実践から学ばせていただいた。